View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Kansai University Repository

関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

Person-Centered Approachから見たNegative Capability : 非指示的なセラピストの中で起きていること

その他のタイトル	Negative Capability from the viewpoint of the Person-Centered Approach : What is happening in non-directive therapists
著者	山根 倫也, 越川 陽介
雑誌名	Psychologist : 関西大学臨床心理専門職大学院紀要
巻	10
ページ	51-58
発行年	2020-03-16
URL	http://hdl.handle.net/10112/00019980

サイコロジスト：関西大学臨床心理専門職大学院紀要　2020 年，第 10 号，51-58.
Psychologist: Bulletin of the Graduate School of Professional Clinical Psychology, Kansai University, 2020 No.10, 51-58.
〔投稿論文〕

Person-Centered Approach から見た Negative Capability
―非指示的なセラピストの中で起きていること―

Negative Capability from the viewpoint of the Person-Centered Approach
― What is happening in non-directive therapists ―

山根　倫也
関西大学心理学研究科
越川　陽介
関西医科大学精神神経科学教室

Tomonari YAMANE
Graduate School of Psychology, Kansai University
Yosuke KOSHIKAWA
The Department of Neuropsychiatry, Kansai Medical University

◆要約◆

本論文では、“Negative Capability” について、Person-Centered Approach の観点から検討を行った。非指示的なアプローチである PCA において、セラピストには “曖昧さを保ち続けられること” が必要であると考えられる。この “曖昧さを保ち続けられること” について、近年、精神医療や心理療法の分野で “Negative Capability” という概念が注目されている。本論文では、PCA における Th のあり方と Negative Capability の共通点と相違点を検討し、非指示的である Th の自己のあり方について考察を行った。そして、非指示的な Th はクライアントから受け取った言葉を Th のコンフィグレーションと共鳴させ、Th 全体としてより大きな体系から言葉を紡ぎ出すという自己一致のあり様を示した。また、Negative Capability を発揮するには、Cl の実現傾向を信じる必要があるという PCA 独自の観点を示唆した。

キーワード：パーソンセンタード・アプローチ、ネガティブ・ケイパビリティ、曖昧さ、コンフィグレーション

Abstract

This paper aims to examine 'negative capability' from the viewpoint of the person-centered approach (PCA). Since PCA is a non-directive approach in nature, PCA therapists need to hold ambiguity. In recent years, the concept of 'negative capability' has attracted attention in the fields of psychiatry and psychotherapy with regards to its characteristics of 'holding anxiety'. The

著者連絡先　Corresponding email address: foqsj2018 # gmail.com　Please replace # with @.

authors considered similarities and differences between the attitudes of the PCA therapist and negative capability, and discussed the manner of self as non-directive therapists. We then described the state of congruence of a non-directive therapist who resonates the words received from the client into their configurations to create words from the large body of the whole person. Furthermore, we suggested that PCA has a unique perspective of believing in the client's actualizing tendency so that the client can enhance 'negative capabilities'.

Key Words: Person-Centered Approach, Negative Capability, Ambiguity, Configuration

Ⅰ．Person-Centered Approach と曖昧さ

Rogers, C. R.（1902-1987）が創始したPerson-Centered Approach（以後、PCA）は、「何が傷ついているか、どの方向に進むべきか、どの問題が重要か、どんな経験が深く隠されているか、それを知っているのはCl自身である」（ロジャーズ，2005，p.17）という、クライアント（Client、以後Cl）の「実現傾向の信頼」を臨床基盤としている。そのうえで、PCAのセラピスト（Therapist、以後Th）は、ロジャーズ（2001a）により提示された建設的なパーソナリティの変化に関わる6つの条件仮説、特に「共感的理解」、「無条件の肯定的関心」、「一致／純粋性」の中核3条件態度に基づいて心理臨床を行なっている。このアプローチの中心仮説は、「個人は自分自身のなかに、自分を理解し、自己概念や態度を変え、自己主導的な行動をひき起こすための巨大な資源をもっており、そしてある心理的に促進的な態度についての規定可能な風土が提供されさえすれば、これらの資源は働き始める（ロジャーズ，2001b，p.162）」というものである。ThがClの実現傾向を信頼し、中核3条件の態度を持って受容的な空間を提供することで、Cl自身が進むべき方向を安全に吟味し選択することができるのである。しかし、実際のカウンセリング場面においてPCAのThは、「この人の考え方のこの部分は自分としては受け入れられないな」など、相手のことをまるごと受け入れられない自分に直面することがある（大石，2016，p.36）。その際、ThがClのことを受け入れたかのように振る舞うのではなく、受け入れられなかったら受け入れられない自分のままでいることを大事にする（大石，2016，p.37）という、自分の中に「受け入れたい」という部分と「受け入れられない」という部分を同時に抱えることが求められる。また、非行臨床におけるセラピーでは、Clが表している問題行動とThが持つ規範と価値観が葛藤を起こすが、この時に、guilt-freeにClを理解したいという思いと、規範をめぐるみずからの価値観との分裂を保持できるかどうかが治療者に求められる（岡村，1999，p.106）。同様に、羽間（2015，pp.50-59；2016，pp.26-34）は、非行臨床における治療者の「スプリッティング」の重要性を指摘しており、治療者には、矛盾する思いの衝突によって引き裂かれる体験をそのままに体験し保持することと、それを可能にする能力を広げることが求められると述べている。さらに、個人セラピー以外の場面でも、PCAの中で発展したエンカウンターグループ（ロジャーズ，2007）やPCAグループ（村山，2014）、PCAGIP（Person-Centered Approach Group Incident Process）法（村山・中田，2012）などでは、複数の参加者の考えや意見を同時に尊重し、かつありのままの自分でいるという態度がファシリテーターには求められる。これらのように、Thやファシリテーターがセラピーやグループ内で起こる矛盾や葛藤の体験を安易に取捨選択せず、曖昧なまま自分の中で保持することがPCAのテーマの1つであると考えられる。

Ⅱ．曖昧さを保持することと Negative Capability

Th が曖昧さを保持することについては、精神医療や他の心理療法の学派でもその重要性が指摘されている。高橋（2012）は、Th には「曖昧ではっきりしないもの、一見 negative としか感じられないもの」を排除せずとどまり、暗在する意味を探りつつそれらを受け止める姿勢が求められると述べ、心理臨床における“曖昧さ”とそこにとどまる能力の重要性を指摘している。また、土居（1992, p.35）は、Th にとって「わからない」という感覚が大切であるとし、Th は判断を積極的に停止することにより、「わからない」感覚を滋養することが必要であると述べている。

その中で、高橋（2012）は、イギリスの詩人 Keats, J.（1795-1821）の造語である「Negative Capability」の概念を紹介している。Negative Capability とは、「不確かさ、不思議さ、疑いの中にあって、早く事実や理由を掴もうとせず、そこに居続けられる能力」である。Negative Capability の訳語については、「負の受容力」、「消極的能力」、「ネガティブな受容性」など今なお統一のものは定まっておらず（高橋, 2012）、構成概念の説明が難解である。藤本（2005）は、Negative Capability の概念の検証を試みており、Negative Capability には自己に対して突きつけられる問題に対処するうえでの「忍耐能力」としての意味合いが比較的強く出ているのではないかと推測している。また、松木（2009）は、イギリスの精神分析家ビオンが Negative Capability について言及していることに触れ、Negative Capability を「わからないことを認識していながら、答えを急がずそのままわからないままにしておくという、無知にもちこたえておく“負の能力”（p.34）」、「目指すものが現れるのをそれまで待っておくという能動的な姿勢を取り続けられる能力（p.159）」と述べている。

一方で、精神科医である帚木（2017, p.8）は、ヒトは分からないものに対して、とりあえず意味づけをし、なんとか「分かろう」とするが、この「分かったつもり」の理解が、ごく低い次元にとどまってしまい、より高い次元まで発展しないと述べている。また帚木（2017, p.79）は、医療における SOAP（Subject, Object, Assessment, Plan；診療録の記載方法）の視点だけで患者と向き合うことの問題点を指摘しており、特に終末期医療では、目の前の事象に、拙速に理解の帳尻を合わせず、宙ぶらりんの解決できない状況を、不思議だと思う気持を忘れずに、持ちこたえていく力が精神科医には要請されると述べている。そのうえで、Negative Capability を「どうにも答えのでない、どうにも対処しようのない事態に耐える能力」と定義し、精神医療のみならず創作行為、教育など幅広い分野において Negative Capability が重要であることを論じている。このように、Negative Capability の概念は、様々な定義を経ながらもその重要性が広く指摘されているのである。

さらに、PCA の領域でも、Negative Capability の概念は検討されている。森岡（2003；2017, pp.133-147）は、Rogers の中核 3 条件仮説と Negative Capability の理論は合致する部分が多いと述べており、PCA と Negative Capability の関連性を示唆している。しかし、PCA が持つ他の心理療法にはない特徴と Negative Capability の関連の検討には、まだ検討の余地が残されているように思われる。Negative Capability の概念は、PCA においても重要であると考えられるが、果たして Negative Capability の概念を取り入れることで PCA の理論にどのような発展が望めるだろうか。また、PCA の理論と従来の Negative Capability の理論との共通点と相違点はなんだろうか。本稿では、これまでの研究を踏まえ、PCA の Th のあり方と Negative Capability の関連について検討を行う。また、本稿では PCA の中でも特に対話系（中田・白崎・斧原、2017：斧原・白崎・中田, 2017）の観点から検討を行う。

Ⅲ．PCA の「非指示性」の検討

PCA の Th のあり方を考えるうえで、「非指示性」は重要な観点である。サンダース（2007, p.178）は、PCA の第 1 原則として「少なくとも内容 content レベルでの非指示的態度の重要性」を提示しており、或るセラピーが PCA のセラピーか否かを判定するための基準枠になっている。また、矛盾や葛藤の体験を安易に取捨選択せず、曖昧なまま自分の中で保持することは、「非指示性」を基盤とするからこそ PCA の Th の中に生じるものであると考えられる。しかし、「非指示性」に関して、同じ PCA の内部でも、その重要さに関する考え方に違いがある。そこで、まずこれまでの「非指示性」に関する議論を概観する。

1．Cain と Grant の論争

「非指示性」の内実に関する論争については、まず Cain（1989；1900）と Grant（1990）の 3 つ論争が挙げられる。中田・今林・岡田他（2015）によると、この論争はまず、Th が非指示性に拘るのは Cl の個別性を無視するものであって PCT（Person-Centered Therapy）とは言えないという、Cain の主張から始まる。それに対し Grant は、Cain のように非指示性をとらえるのは道具として非指示性を考えているのであって、本質として重要なのは原理的重要性であると Cain を批判する。その批判に対して今度は Cain が Grant を批判するという流れになっている。Cain と Grant の論争は、非指示性を Cl の成長や自己受容、洞察のために道具のように扱う道具的非指示性と、Cl を尊重する姿勢そのものを表す原理的非指示性という 2 つの非指示性の違い、そして原理的非指示性は Th の仮説に過ぎず、本当に尊重になっているか、Cl にとって良いものかは分からないという問題提起を含む重要な議論である。また、この「非指示性」に関する議論は、古典的クライアント中心学派と Gendlin によって考案された体験的療法の対立の中心テーマとなっている。

2．Brodley と Lietaer の論考

中田（2016）は、古典的クライアント中心学派が体験過程療法を Rogers のセラピーの発展形と認めない論考として、Brodley（1990）の論文を紹介している。Brodley（1990）は、CCT（Client-Centered Therapy）と体験過程療法は、CCT は Cl を全人的に信頼するのに対し、体験過程療法は Cl の体験過程を信頼するという点において異なっていると述べている。すなわち、CCT は、Th が非指示的であることで Cl が建設的な方向性を生み出すという、CCT の原則である実現傾向の信頼に基づいているが、体験過程療法では、Cl の体験過程のレベルを高いレベルにいくように促すことが Th の責任であり、これは実現傾向の信頼ではなく専門家が考える特定の点に関する信頼に基づいているという指摘である。一方で、中田・秋山・大田他（2016a）は、フォーカシングや Emotion-Focused Therapy はクライアント中心療法と言えるかどうか、という点に関する Lietaer（1998）の論文を紹介している。Lietaer（1998）は、Th が Cl に対し、まったく影響を及ぼさないことは不可能であり、その意味で非指示的なセラピーなどありえないと指摘しており、中田・秋山・大田他（2016a）は、Th が Cl に影響することは、古典派が強調するように、Cl の中心性を奪う面を持っているとしながらも、影響していい / してはいけない、のどちらが正しいというのではなく、影響のことを常に意識して Cl に臨み、正しいものがはっきりせず、曖昧なまま、揺れ続けるあり様こそ、CCT/PCT のセラピーにおいて重要な Th の内的条件かもしれないと述べている。Brodley（1990）と Lietaer（1998）の論考を踏まえ、中田（2016）は、古典的クライアント中心学派の視点からは、課題を指示しようと考えつつ関わること自体が CCT と体験過程療法では発想が全く異なり、またそれは小さいが決定的な違いであると述べている。

これらの議論は、CCT と体験過程療法の違いを明らかにするとともに、PCA の Th が非指示的であることが、セラピーにおいて Cl に影響するかどうか、また実現傾向をどのように信頼するかという点において、PCA の Th が考え続けなければならないものである。しかし、これらの議論では、非指示的であると Th の中でどのようなことが起こるのかについては言及されていない。

3．非指示性と Th の自己一致

非指示的な Th のあり方について考えるうえで、中田・蒲生・中臺他（2017）が紹介している非指示性を重視するパーソン・センタード・プレイセラピーに関する論文（Moon, 2002）は示唆的である。非指示性を重視するプレイセラピーにおいて Moon（2002）は、セラピー中に Cl を制限することはあるとしたうえで、その制限は Th が落ち着いて、Cl に温かい眼差しを保ち続けるためにあると述べている。つまり、非指示的なセラピーにおいての指示は、Th が自己一致し続けるために必要な場合においてのみなされるということである。この論考から、非指示性と自己一致、すなわち Th の自己のあり方の関連が示唆される。大石（2002, p.65）は、長期的にわたり受容的なかかわりを続けていく際、Th が自己の内面から自発的に生まれてくる動きに対して常に抑制的であると、面接は主体性のない Th により表面的な共感に終始することになると述べ、Cl が受け取る準備ができているときの、Th の自己一致から生まれる自己表明の重要性を示唆している。果たして、非指示的な Th の自己の中では、どのようなことが起こっているのだろうか。

Ⅳ．PCA と Negative Capability の関連の検討

1．Th の自己のあり方と Negative Capability からの示唆

PCA の Th の自己のあり方について、Mearns & Thorne（2000, pp.101-119）は、Rogers の Self 理論を多元的に発展させて、Configuration という概念を提唱している。Configuration とは、個人によって象徴化された、あるいは、前象徴化された感情・思考・行動の一貫性のあるパターンのことを示す。いくつもの part としての Configuration が総体として自己（Self）を成しているのである。また、Mearns & Thorne（2000, p.116-119）は、矛盾している Configuration も同時に存在できるように、Self の中である程度住み分けがされており、困難に直面した際、人は Self 全体ではなく、Self の part と適応させ、残りの Self を保護すると述べている。

一方で、並木（2018）は、セラピーにおける Th の自己利用の重要性を指摘しており、Th は自己の様々なあり方を探求し、自身を受容し信頼する関係性を自己との間で築く必要があると述べている。

これらの論考を用いて非指示的な Th の自己のあり方を説明する際に、Negative Capability の概念が有用であると考えられる。山内（1986, pp.145-172）は、Keats の詩人としての Negative Capability について、人間の美しさと醜さという両価的なものを自分の中にとどめることにより、より大きな体系から、人間全体の複雑さを表現すると述べている。また、PCA のセラピーにおいても、Vanaerschot（1990, pp.280-286）は Negative Capability が Th の開放性の本質であるとし、Negative Capability により、自己の中の既知の構造をほどき、固定化された体験を流動的なものにすること、また自己の中で複数の体験が同時に存在できるようになることを述べている。そして、流動的な自己の中でより大きな認識の体系 large body of knowledge として新しい構造を生み出すことができると述べている。この流動的な自己の中で、複数の体験を同時に保持し、より大きな認識の体系を生み出すという論は、これまでの PCA の理論にはなかったもののように思われる。

これまでの論を踏まえて、非指示的な Th の

自己の中で起こっていることの記述を試みると以下のようになる。まず、Th は Cl から受け取った言葉を、ただリフレクトしたり、意味・内容的理解で指示や助言をしたりするのではなく、Th の Self の中に持ち帰る。そして、Cl の言葉と今この場所、瞬間に起こっている出来事に対してこれまでの自分の経験など全ての part を共鳴させ、Self の中で吟味する。その時に、一見 negative な Cl の言葉や part にも、受容、共感、一致を示す。これは Configuration の概念において重要な点であり、また Th の自己一致のあり方であると言える。そして、自分のある part によるその場限りの応答ではなく、Th 全体として、より大きな体系から Cl に伝える言葉を紡ぎ出すのである。part を共鳴させ、Self の中でより大きな体系の認識を生み出すときに、Th の Negative Capability が要請される。

2．PCA と Negative Capability の相違点

PCA の Th の自己のあり方を記述する際に Negative Capability の概念が有用であることを示したが、従来の Negative Capability の概念と PCA の理論に相違点はあるだろうか。Negative Capability には、藤本（2005）は「忍耐能力」の意味合いが強いと推測しており、また松木（2009, p.159）は「目指すものが現れるのをそれまで待っておくという能動的な姿勢を取り続けられる能力」と定義している。また、高橋（2012）が体験過程理論から曖昧なものへの関わりを検討しており、まだ言葉になっていない曖昧なものが、明在化される過程において Negative Capability が要請されると読むことができる。これらの点から、従来の Negative Capability は「目指すもの」が「明らかになる」まで「耐える」という、目的指向な側面があると考えられる。一方で、特に対話系の PCA の Th において「非指示性」のセラピーを成り立たせる基盤は、「実現傾向の信頼」である。そして、Th が曖昧さを保持することは、何か Cl に対して変化を求めているのではなく、Cl そのものを尊重するあり様であり、また Th が自己一致し続けようとする内的な努力である。つまり、目的指向的であるか否かという点において、PCA の理論と従来の Negative Capability の概念は相違していると考えられる。

ところで、心理臨床において Cl の力に対する信頼を持たない Th の Negative Capability に意義はあるのだろうか。もし Cl の力を信頼せず、Cl には力がないものとしてセラピーに臨むのであれば、Th には Negative Capability ではなく、専門家の知識と経験による問題解決法の早急な教授が求められるだろう。Th が曖昧なものを自分の中に保持し続けることが有用であると考えるならば、そこには Cl 自身の力への信頼という基盤が必要であると考えられる。つまり、Th の Negative Capability を成り立たせるのは、Cl の実現傾向の信頼という臨床観である。この点において、PCA は他学派にはない Negative Capability に対する視点と理論を持っていると言えよう。

Ⅴ．まとめ

これまで、Negative Capability について PCA の観点から検討を行ってきた。特に、「非指示性」との関連について、Th の自己のあり方を含め、記述を試みることでその関係を探ってきた。しかし、これらはすべて概念上の仮説であり、実際の各 Th の中で起こっていることはより複雑で、個人によってそのあり方が異なる可能性が考えられる。そのため PCA の Th には、Th 一人ひとりに、自己のあり方が問われており、その意味でも自分の中で曖昧さを保持し続けることが必要になるだろう。

ところで、Th が Negative Capable になるにはどうすればいいのだろうか。PCA の観点から考えると、先述したように Cl の実現傾向を信頼することが必要だろう。そのためには、カウンセリング理論を学ぶことに加え、Th 自身が Cl の体験をすることも有用ではないだろうか。表

層的な知識レベルではなく、体験レベルでPCAのセラピーを実感し、自分の実現傾向が信じられていることの感覚を体感することで、自身の臨床観を培うことができるだろう。また、Capability は能力という意味であることから、訓練により向上するものだと考えられる。Thの成長において、スーパービジョン（Supervision、以後SV）は重要な要素である。これまで述べてきたように、Negative Capableであるためには、Thが自身の体験に開かれ、またpartごとの関係性を十分に吟味することが必要である。中田・小野・構他（2016b）は、他の学派とは異なるPCAにおけるＳＶの基本的な考え方として、Lambers（2013）の論文を紹介しており、バイジーの体験を尊重するPCA特有のSVの有用性を示している。PCA以外の他学派では、ThがNegative Capableであるためにどうすればいいか、どのように考えられるだろうか。もしくは、Negative Capabilityの概念自体をどのように捉えるだろうか。本稿はPCAの観点から検討を行なったが、今後、様々な学派からもNegative Capability概念の検討を行い、そして学派ごとの相違点や共通点を探索することも有意義であるかもしれない。

文　献

Brodley, B. T.（1990）: Client-Centered and Experiential: Two different therapies, In Lietaer, G., Rombauts, J., & Balen, R.（Eds.）*Client-centered and Experiential Psychotherapy in the Nineties*: Belgium: Leuven University Press, 78-107.

Cain, D. J.（1989）: The paradox of non-directiveness in the person-centered approach. *Person-Centered Review*, 4(2): 123-131.

Cain, D. J.（1990）: Further thoughts about non-directiveness and client-centered therapy. *Person-Centered Review*, 5(1): 89-99.

土居健郎（1992）：『新訂 方法といての面接―臨床家のために―』医学書院.

藤本周一（2005）：John Keats: “Negative Capability”の「訳語」をめぐる概念の検証 大阪経大論集 55(6)：5-27.

Grant, B.（1990）: Principled and Instrumental Non-directiveness in Person-Centered and Client-Centered Therapy. *Person-Centered Review*, 5(1): 77-88.

帚木蓬生（2017）：『ネガティブ・ケイパビリティ―答えの出ない事態に耐える力―』朝日新聞出版.

羽間京子（2015）：治療者の純粋性について―非行臨床から得られた知見―　村瀬孝雄・村瀬嘉代子（編）『全訂 ロジャーズ―クライアント中心療法の現在―』日本評論社　50-59.

羽間京子（2016）：治療者がみずからの内的体験をそのままに体験し保持することの意味―非行臨床の経験から―　本山智敬・坂中正義・三國牧子（編）『ロジャーズの中核三条件一致―カウンセリングの本質を考える1―』創元社　26-34.

Lambers, E.（2013）: Supervision. In Cooper, M., O'Hara, M., Schmid, P. F., & Bohart, A. C.（Eds.）*The Handbook of Person-Centered Psychotherapy and Counselling 2nd edition*: Basingstoke: Palgrave, 453-467.

Lietaer, G.（1998）: Unconditional Positive Regard: A controversial basic attitude in Client-Centered Therapy. In Levant, R. & Shlien, J.（Eds）*Client-Centered Therapy and Person-Centered Approach New Direction in Theory Research and Practice*: New York: Praeger, 41-58.

松木邦裕（2009）：『精神分析体験―ビオンの宇宙―』岩崎学術出版.

Mearns, D. & Thorne, B.（2000）: *Person-Centred Therapy Today New Frontiers in Theory and Practice*: SAGE Publication Ltd, 101-119.

Moon, K.（2002）: Non-directive client-centered work with children. In J. C. Watson, R. N. Goldman & M. S. Warner（Eds）*Client-centered and experiential psychotherapy in the 21st century: UK*: PCCS Books, 487-492.

森岡正芳（2003）：治療的会話 / 負の受容力 / 物語・語り　臨床心理学 3(3)：413-415.

森岡正芳（2017）：『物語としての面接―ミメーシスと自己の変容―』新曜社.

村山正治・中田行重（2012）：『新しい事例検討法 PCAFIP 入門―パーソン・センタード・アプローチの視点から―』創元社.

村山正治（2014）：『「自分らしさ」を認めるPCAグループ入門―新しいエンカウンターグループ法―』創元社.

中田行重（2016）：古典的クライエント中心学派（Classical Client-Centered Therapy）がGendlinを認めない論理から学ぶ― Brodley（1991）の紹介と考察― 関西大学心理臨床センター紀要 7：131-140.

中田行重・今林優希・岡田和典・川崎智絵（2015）：非指示性に関するCainとGrant論争―本当のPerson-Centeredはどちらなのか？― 関西大学心理臨床セン

ター紀要 6：79-88.
中田行重・秋山有希・大田由佳・大谷絵里・中森涼太・長尾海里（2016a）：体験的療法はクライエント中心療法からの新たな発展か― Lietaer（1998）の紹介と考察― 関西大学心理臨床センター紀要 7：111-120.
中田行重・小野真由子・構美穂・中野紗樹・並木崇浩・本田孝彰（2016b）：パーソン・センタード・アプローチにおけるスーパービジョンの基本的考え方― Lambers（2013）の紹介― 関西大学心理臨床センター紀要 7：101-110.
中田行重・白崎愛里・斧原愛（2017）："パーソン・センタード"とは何か―その輪郭の明確化に向けて（1）―『日本人間性心理学会第36回大会プログラム・発表論文集』136-137.
中田行重・蒲生侑依・中臺一樹・野村明希・望月大輔・山島陽香（2017）：非指示性を重視するパーソン・センタード・プレイセラピー 関西大学心理臨床センター紀要 8：101-110.
中田行重・斧原藍・白崎愛里（2018）：多元性に着目した Person-Centered self 理論の新たな展開― Configuration とは何か― 関西大学心理臨床センター紀要 9：95-102.
並木崇浩（2018）：パーソン・センタード・セラピストが"哲学する"意義― being とセラピストの自己の利用の観点から― 人間性心理学研究 36(1)：69-76.
大石英史（2002）：ロジャーズ「自己一致」再考―私にとってのクライエント中心療法― 村山正治・藤中隆久（編）『クライエント中心療法と体験過程療法―私と実践との対話―』ナカニシヤ出版 56-70.
大石英史（2016）：クライエント中心療法における一致の臨床的検討 本山智敬・坂中正義・三國牧子（編）『ロジャーズの中核三条件一致―カウンセリングの本質を考える 1―』創元社 35-43.
岡村達也（1999）：『カウンセリングの条件―純粋性・受容・共感をめぐって―』垣内出版.
斧原藍・白崎愛里・中田行重（2017）："パーソン・センタード"とは何か―その輪郭の明確化に向けて（2）―『日本人間性心理学会第36回大会プログラム・発表論文集』80-81.
ロジャーズ，C. R.（2001a）：『ロジャーズ選集（上）カウンセラーなら一度は読んでおきたい厳選33論文』H. カーシェンバウム・V. L. ヘンダーソン（編）伊東博・村山正治（訳） 誠信書房 Rogers, C. R.: The Necessary and Sufficient Conditions of Therapeutic Personality Change. *Journal of Consulting Psychology*. 21(2): 95-103, 1957.
ロジャーズ、C. R.（2001b）：『ロジャーズ選集（上）カウンセラーなら一度は読んでおきたい厳選33論文』H. カーシェンバウム・V. L. ヘンダーソン（編）伊東博・村山正治（訳）誠信書房 Rogers, C. R.: A Client-centered/Person-centered Approach to Therapy. In Kutash, I. & Wolf, A.（Eds）*Psychotherapist's Casebook*: Jossey-Bass, 197-208, 1986.
ロジャーズ、C. R.（2005）：『ロジャーズが語る自己実現の道』諸富祥彦・末武康弘・保坂亨（訳）岩崎学術出版 Rogers, C. R.: *On Becoming a Person―A Therapist's View of Psychotherapy―*, Constable & Company Ltd, 1961.
ロジャーズ、C. R.（2007）：『新版 エンカウンター・グループ―人間信頼の原点を求めて―』畠瀬稔・畠瀬直子（訳）創元社 Rogers, C. R.: *Carl Rogers on Encounter Groups*: Harper & Row, 1970.
サンダース，P.（2007）：『パーソンセンタード・アプローチの最前線―PCA 諸派がめざすもの―』近田輝行・三國牧子（監）小野京子・神谷正光・酒井茂樹・清水幹夫・末武康弘（訳）コスモス・ライブラリー 171-187. Sanders, P.：*The Tribes of the Person centred Nation A Guide to the Schools of Therapy Associated with the Person-centred Approach*: Ross-on-Wye: PCCS Books, 2003.
高橋寛子（2012）：心理臨床における"曖昧さ"とそこにとどまる能力― "Negative Capability" と"暗在性（the Implicit）からの考察"― 京都大学大学院教育学研究科附属臨床教育実践研究センター紀要 16：65-76.
Vanaerschot, G.（1990）: The process of empathy Holding and letting go, In Lietaer, G., Rombauts, J. & Van Balen, R.（Eds）*Client-centered and experiential psychotherapy in the nineties*: Belgium: Leuven University Press, 280-286.
山内正一（1986）：『キーツ研究―物語詩を中心に―』大阪教育図書.